

社会民主党機関紙

NO.108
熊本県版

社会新報

THE SHAKAI SHIMPO

2026年秋号 (曜日) 号外

発行所

社会民主党全国連合機関紙宣伝局

週刊(木曜日発行)

〒104-0043 東京都中央区浜3-18-17マルキ熊本ビル5F

電話代表 03(3553)3787・振替 00140-1-3203

●定価185円 ●1ヵ月720円 ●送料168円

一人ひとりの命と尊厳が報われる社会へ 自助の押し付け、選別と分断を乗り越え、 公の責任で「生きる」を支える

益城町・惣領交差点での朝の街頭演説に立った社民党副党首・熊本県連合副代表の橋村りか。テレビ報道やSNSで強まる「優生思想的」な風潮、さらには大災害の現場で声を上げられず苦しむ被災者や福祉現場の叫びを取り上げ、いま政治が向き合うべき根幹の課題と社民主義の果たすべき役割を力強く訴えた。演説の要旨を報告する。

① 優生思想の暗雲とネットの中傷に抗う

「役に立つか」で生命を選別する

社会を許さない

8月末のテレビ番組で紹介された障害のある子どもとご家族の生活をめぐり、SNS等で「周りの子がかわいそうだ」「自己責任だ」「安楽死を検討すべき」といった凄惨な誹謗中傷が巻き起こっている。

橋村は、17歳で他界した実娘との闘病や学校生活を振り返りつつ、「戦後の優生保護法下で国策として行われてきた『命の選別・コントロール』の歪みが、今なお子どもたちの人生に降りかかっている」と強い危機感を表明。「人は誰も一人では生きていけない。はた目から見てわかる障害や病気のある人、高齢の方々に『生きている意味があるのか』と言わせるような冷たい社会を変えなければならぬ」と訴えた。

② 地震被災地・福祉現場からの悲痛な叫び

「声を上げられない人」の痛みに

寄り添うアウトリーチを

7月の熊本での地震以降、県内各地の支援現場や放課後等デイサービスを訪問してきた橋村。情緒支援が必要な子どもたちが大きな心の傷を負っている実態や、重度障害児の命をつなぐために停電・断水の中で極限の努力を続けてきた家族の姿を告発した。

さらに現場の事業者の「困っているとすら声を上げられない人」に対し、今の社会は『言わないなら困っていないんだろう』と突き放している」という言葉を紹介。「苦しいと叫ぶ余裕すらない人々の存在を忘れてはならない。『自助』を第一とする政治は公の責任放棄だ。まずは公共が責任を持って命と暮らしを守り抜く『公助』への転換が必要だ」と力説した。



社民党副党首

社民党熊本県連合副代表

橋村りか

苦しいと叫ぶ余裕すらない
人々の存在を
忘れてはならない。
『自助』を第一とする政治は
公の責任放棄だ。



③ 防衛費膨張・新戦術ではなく

「防災・福祉」へ予算を
武器では命を守れない

—— 平和と人権こそが最大の防衛

防衛省が厚生労働省へ戦傷医療の協力を求め、ドローン型無人機の大量導入を進める動きに対し、橋村は「無人機が攻撃する足元にあるのは誰かの命だ。武器の大量購入で本当の平和は保てるのか」と鋭く問いかけた。

災害が頻発し、足元の暮らしや福祉が脅かされている今、優先すべきは防衛費の拡大ではなく、医療・福祉・教育・防災といった「生命を支える施策」である。誰かの命を犠牲にする安全保障ではなく、人権と尊厳を守る取り組みこそが国の信頼を高めると主張した。

【橋村りかの決意】

「私はここにいていい」

—— すべての人が胸を張れる政治を
演説の結びで橋村は、『自分はこちらにいていいのか』と不安を抱える被災者や生きづらさを抱える人々に、胸を張って『ここで生きていていいんだ』と言える権利を保障するのが政治の義務だ』と強調。

「自助・共助・公助の順番を逆転させ、公共の力で誰も取り残さない社会をつくる。そのためにも、一軒一軒の困りごとに耳を傾け、皆様の声をしっかり国政と県政へ届けてまいります」と力強く結んだ。

2026年9月10日(木)
熊本県益城町惣領交差点

人権と尊厳を守る取り組みこそが
国の信頼を高める！

今、優先すべきは
防衛費の拡大ではなく、
医療・福祉・教育・防災といった
「生命を支える施策」である。



自助・共助・公助の順番を逆転させ、
公共の力で誰も取り残さない社会を
つくる。